AIの進化と僕たちの未来

柏市立柏第五中学校　三年　宮崎　豪

「宿題の読書感想文を、AIに書いてもらう人がいるらしい。」

最近、そんなニュースを耳にして僕は大きな衝撃を受けた。スマートフォンの翻訳機能や、こちらの質問に対して一瞬で何でも答えてくれる生成AIは、今や僕たちの生活にすっかり溶け込んでいる。わからないことを検索すれば瞬時に答えに辿り着き、文章の要約や画像の作成までこなしてしまうAIは、確かに劇的に生活を便利にしてくれた。しかし、僕はAIの進化が急速に進む今だからこそ、「考える」という人間だけの特権を、僕たちは決して手放してはならないと強く主張したい。

実際、僕も学校の調べ学習の際に、話題の生成AIを使ってみたことがある。キーワードをいくつか入力しただけで、画面には一瞬にして完璧なまとめの文章が表示された。そのスピードと正確さには感動すら覚えた。しかし、できあがった美しい文章をじっと眺めているうちに、僕はどこか冷たさのような、奇妙な物足りなさを感じている自分に気がついた。そこには、僕が実際に図書館で本を探したときの苦労や、資料を読んで「なるほど」と心を動かされた瞬間など、人間らしい感情や温度が一切含まれていなかったからだ。AIが作った文章は、たしかに正解かもしれない。しかし、それは、「僕の言葉」ではなかった。効率を追い求めるあまり、自分の頭で悩み、言葉を紡ぎ出すという大切なプロセスを僕はAIに丸投げしてしまっていたのだ。

では、AIがさらに進化していくこれからの未来、僕たち人間はどう生きるべきなのだろうか。それを考えるためには、AIと人間のそれぞれの強みを正しく理解する必要がある。

AIの得意分野は、膨大なデータを記憶し、整理し、過去のパターンから計算して正確な答えを導き出すことだ。これは人間がどれだけ努力しても敵わない領域である。一方で、僕たち人間は、正解が一つではない問いに対して悩み、葛藤することができる。また、他人の痛みに共感して涙を流したり、何もないゼロの状態から新しいアイデアをひらめいたり、失敗から何かを学び取ったりすることもできる。これらはすべ

て、心と感情を持つ人間にしかできないことだ。

もし僕たちが、面倒だからという理由で AI に考えることをすべて任せてしまったら、僕たちの「考える力」「感じる力」は少しずつ衰えていってしまうのではないだろうか。答えを教えてくれる便利な道具に頼りすぎるあまり、人間が自ら問いを立てる力を失ってしまっては、本末転倒である。

これからの社会において、AI の進化を止めることはできないし、その技術を拒絶して生きるべきでもない。大切なのは、AI を「自分の頭の代わりに使う道具」にするのではなく、「自分の可能性を広げるためのパートナー」として賢く活用することだ。AI に計算やデータの整理を任せることで、人間はよりクリエイティブな活動や、人と人との深いコミュニケーションに時間を費やすことができるようになるはずだ。

便利な時代だからこそ、あえて立ち止まって考える。効率の良さだけを追い求めず、自ら問いを立て、悩み、自分の言葉で表現する。そんな「人間らしい生き方」を何よりも大切にしながら、僕は AI と共に歩み、より豊かな社会を創っていく一員になりたい。